

2021年8月1日 説教「今は見えるのです」

ヨハネの福音書9章13～25節

今朝は先週の記事の続きを学びます。イエス・キリストによって、見えるようにされた盲人の話です。

1. パリサイ人の前で (13～17節)

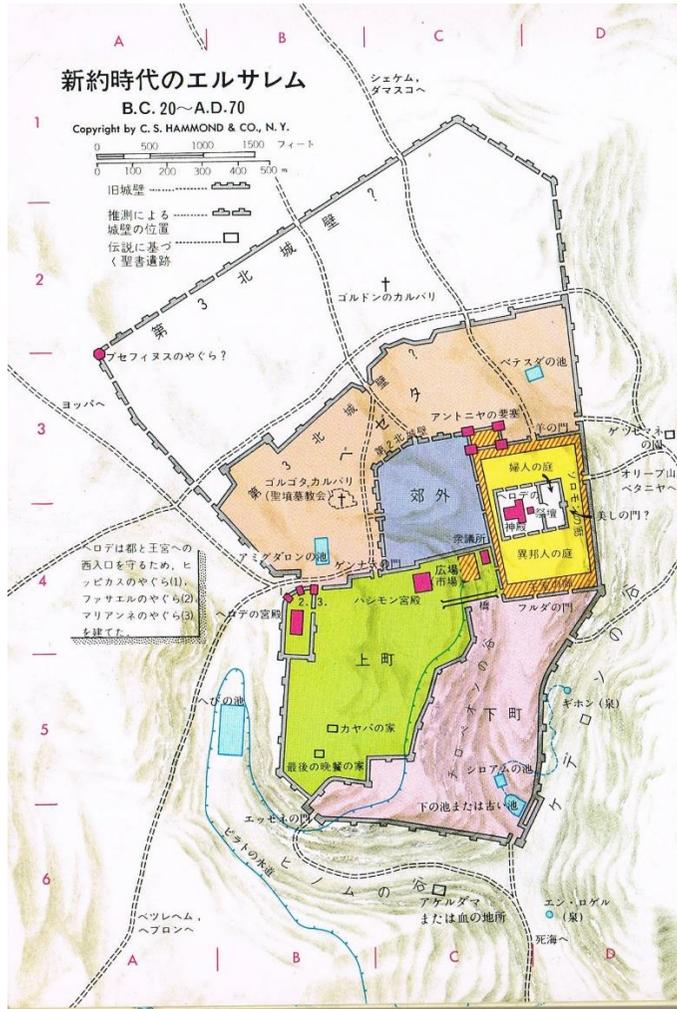
①パリサイ人達のところに (13～14)「彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れていった。ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。」盲人の目がイエスによって、見えるようにされたことを聞いて、信じられなかったユダヤたちは、彼をパリサイ人たちのところに連れていきました。彼らの主張が正当化されると考えたからです。また、この出来事を問題とする材料をもっていました。それは盲人のいやしは安息日になされたことでした。

②元盲人への質問 (15)「こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。『あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。』」パリサイ人はイエスに敵意を持っていましたので、渡りに舟とばかり、元盲人に問います。「お前はどのようにして見えるようになったのだ？」すると、元盲人は、率直に伝えます。あの方が泥を目に塗ってくださり、私は(シロアムの池で)、洗ったのです。すると、見えるようになりました。もちろん、今も確かに見えていると証言したのです。

③その人は罪人か (16～17)「すると、パリサイ人の中のある人々が、『その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ。』』と言った。しかし、ほかの者が言った。『罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。』そして、彼らの間に、分裂が起こった。そこで彼らはもう一度、盲人に言った。『あの方が目をあけてくれたことで、あの方が何だと思っているのか。』彼は言った。『あの方は預言者です。』この件に関して、あるパリサイ人は「その人は神から出たのではない」として、その理由を「安息日に仕事をしてはならない」(出エジプト20:10)という律法に反しているからとします。他のパリサイ人は「罪人にこのようなしるしはできるだろうか」と言い、分裂が起きました。イエスは「羊が安息日に穴に落ちたら、それを引き上げてやらないでしょうか。」(マタイ12:11)と教えられています。パリサイ人たちに尋ねられて、元盲人が「あの方は預言者です。」と述べたのは神からの業と信じたからでしょう。

2. 元盲人の両親に審問 (18～23節)

①両親への質問 (18)「しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということ信じず、ついにその両親を呼び出して、尋ねて言った。『この人



があなたがたの息子で、生まれつきの盲目だったとあなたがたに言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。』ユダヤ人たちは、盲人の癒しを信じるできませんでした。全くの別人なのでは、あるいは元々彼は見えていたのではと疑い、両親を呼び出して質問しました。「この人はあなたの息子か?」「彼は生まれつき盲目であったか?」

もし本人だとして、「どうして見えるようになっているのか」とたたみかけます。

②両親の答え (19~21)「そこで両親は答えた。『私たちは、これが私たちの息子で、生まれつきもう盲目であったことは知っています。しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。』」両親は証言しました。①彼が確かに自分たちの息子である。②生まれつきの盲人である。③だれが彼の目をあけたのかは知りません、と証言。その上で、実際のことは大人である本人に聞いてください、というのが両親の願うところでした。

③両親の心の内 (22~23)「彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白すれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。そのために彼の両親は、『あれはもうおとなです。あれに聞いてください。』と言ったのである。」もともと、両親の答えには思惑もあったようです。両親は息子の目を開けてくださったのがイエスであることを認め、その方がキリスト(救い主)と認めるほどに、喜びと感謝をもっていたようなのです。しかし、もしそれを告白すれば、ユダヤ人会堂から追放されてしまうと思ったかららしいのです。

3. 盲人だった人の立証 (24~25 節)

①盲人だった人へ再質問 (24)「そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。『神に栄光を帰しなさい。私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ。』」両親から情報を得ようとしても、埒が明かないのをみると、ユダヤ人はもう一度、盲人であった人と呼ばしめたのです。彼がやってくるなり、彼らは「神に栄光を帰しなさい」と命じたのです。横柄ですね。外からみれば、その横柄なユダヤ人たちは自分たちのプライドを立てることに精一杯で神に栄光を帰していません。盲人であった人の方が神の前に謙遜で、神に栄光を帰しています。ユダヤ人たちは、上から目線で、「私たちはあの方が罪人だと知っている」と言い放ちます。安息日を守っていないと言いたいのでしょうか。

②私は知らない (25a)「彼は答えた。『あの方が罪人かどうか、私は知りません。』」それに対して、盲人であった人は答えます。私はあの方が

罪人であるかどうかはわかりません。謙遜な言い方です。そもそも、他の人を「罪人」と言うことは傲慢ですが、ユダヤ人はそれに気づいていませんでした。

③私が知っている事 (25 b)「ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」盲人であった人は、自分の知っていることだけを伝えました。一つは、以前は目が見えなかったということ、二つ目は、現在は見えるということでした。ありのままを彼は述べたのです。

《結論》 盲人が見えるようになったということについて、周辺にいたユダヤ人

たちは素直に信じるできませんでした。パリサイ人たちの力を借りて、目が見えるようになったという出来事は偽りであることを、明らかにしようとしたのです。彼らの手がかりになったのは、その出来事があった日は安息日であったということでした。たとえ盲人が見えるようになったのだとしても、安息日にそんなことをするのは律法違反。そんなことを、神から導かれて行おうはずがないと責めたようとしたのです。今朝の聖書箇所では、イエス・キリストは登場していませんが、もしそこにおられたなら言われたことでしょう。「安息日に穴に落ちた羊は、その所有者は何をしても引き上げるでしょう。人間は羊より、はるかに値打ちのあるものでしょう。それなら、安息日に良いことをすることは、正しいのです。」(マタイ 12:11、12)。

今朝の聖書箇所を読み、おもしろいことは、ユダヤ人たちもパリサイ人たちも、盲人がイエス・キリストの手で見えるようになったことを信じようとしていないのです。ところが、イエスをキリスト(救い主)であることを否定するためには、盲人が見えるようになったということを前提にしながら、それを律法違反だと責めようとするという自己矛盾を起こしていることです。

一方、キリストによって目を開けていただいた人の云う事はとてもシンプルでした。そしてそこには真実なるものをみます。つまり、ユダヤ人たちが、イエス・キリストによって目が見えるようにしてもらったことについて、問いただされた時に、彼が答えた内容です。「私はあの方が罪人であるかどうかは、わかりません。ただ一つのことだけはわかります。以前は見えませんでした。でも、今は見えるのです。」いくら責められても、彼は起きたことをそのままに伝えたのです。そこに、キリストの真実が浮かびあがってきます。

新垣勉という伝道者がいます。現在では一般の歌手としても知られています。中学校の英語の教科書などにも取り上げられています。生まれた時の不始末で盲人となった新垣さんは、沖縄においてメキシコ系アメリカ人と日本人の母の間に生まれましたが、祖母によって育てられました。その祖母が亡くなった時に、人生を悲観し両親をのろ

ったのです。彼は歌が好きで、ラジオで讃美歌を聞いたことから、教会に通うようになりました。勉は牧師に自分の思いのたけを伝えました。それを聞いた牧師は、彼をひきとりました。やがて神の恵みのうちに、キリストを人生の主とするようになります。両親への憎しみは消え、人々のために働きたいと思うようになり、勉は、伝道者になることを志したのです。後に彼の声が神様からの恵みであることを認められ、音楽伝道者として仕えるようになります。新垣さんの証は、彼の霊の目が見えるようになったということです。

私どもの目をも主は開けてくださいます。「わたしは世の光です」と言われた主は、私たちの罪を認めさせ、キリストの十字架と復活の福音を通して、私たちの霊の目も開いてくださいます。イエス・キリストを救い主であることを信じ、救いを受けることは、すなわち霊の目が開かれることです。キリストにその目を触れていただき、新しい命に生きたいものです。